

施設利用と住民組織 (その2)

阿部和枝・小林昭子

(宮城県農業センター)

The Relation between the Utilization of the Public Hall
and the Organization of the Inhabitants. Part 2.

Kazuo ABE and Akiko KOBAYASHI

(Miyagi Prefectural Agricultural Research Center)

は し が き

私たちは、ここ数年来暮らしと地域範域との関わり方について検討を重ねている。我々の暮らしはいろいろな社会集団に含まれて存在している。その最小の単位は家族であり、組、集落、旧村、市町村と幾つかの節を持ちながら次第に広域化する。これらはいずれも地縁を軸としたまとまりであり、暮らしはそのすべてに含まれるが関わり方に強弱があり、それは当該地域のもつ条件によるところが大きい。現代においては、コミュニティづくりのために各種の施設整備や組織再編が進められており、かかる観点から地域範域の意味が問われている。

本県においては、多くの場合、末端集落に住民自治(合意)の機能を有するが、一方、社会的経済的条件の変化に伴い生活圏の拡大傾向も否定できない。本報告はコミュニティづくり推進に際しての旧村レベルの範域の意味と条件を検討するため、農村地域における派生集団の動向を中心に考察したものである。

1 調査対象地区の概況

調査対象地区は登米郡中田町浅水地区と、加美郡中新田町鳴瀬地区である。いずれも合併前の旧村であり、現在小学校区となっている。調査にあたっては各地区内の巻部落、

平柳部落を選定し農家調査を実施した。その概要は図1、表1に示す通りである。更に特徴的な点をあげれば中田町は町としての中心的機能の蓄積が乏しく、これに対して中新田町は農業のみでなく商業も盛んで郡の中心的な町である。

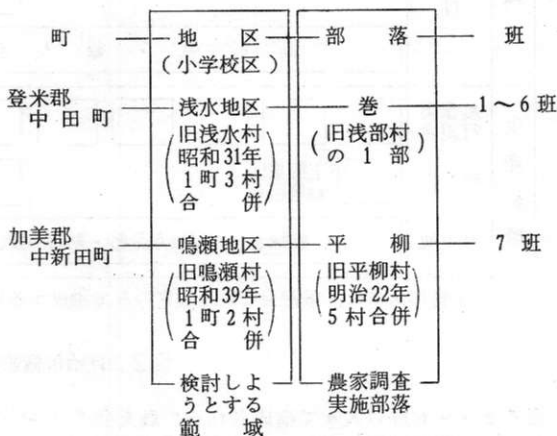


図1 調査対象地区の構成

表1 調査対象地区の概況

区 分	登 米 郡 中 田 町			加 美 郡 中 新 田 町		
	中 田 町	浅水地区	巻 部 落	中新田町	鳴瀬地区	平柳部落
総 戸 数	3,509 戸	767	50	3,780 戸	567	100
農 家 戸 数	2,908 戸	575	48	1,381 戸	500	86
耕 地 面 積	3,653 ha	671	62	1,838 ha	805	148
1 戸 当 り 耕 地 面 積	130 a	120	130	130 a	150	170
水 田 率	96.9 %	91.6	92.1	85.8 %	95.5	74.0
専 業 農 家	304 戸	35	2	62 戸	30	5
1 兼 農 家	1,005 戸	200	9	376 戸	193	36
2 兼 農 家	1,599 戸	340	37	943 戸	277	45

注. 1975年センサス。

2 組織集団活動の範域

1. 巻部落における組織集団活動

自治組織：巻部落会があるが契約講と表裏一体の関係にあり、又、同時に行政区、農家実行組合の範域でもある。共有財産として36aの林野と生活センター施設を所有している。

生活関係組織：年令集団は、かつて年序列に組織され

た講に、状況変化に対応した名称をかぶせて同じメンバーが構成している姿をみることができる。青年会(農協青年部)、婦人会(農協婦人部、生活改善クラブ)、若妻会(山の神講)、六十寿会があり、組織単位は巻部落の範囲となっているが、活動は沈滞している。青年会連合会、婦人会連合会など浅水地区としてのまとまりでの活動が目立っている。

生活関係組織：1～2班の人々で構成される“さつき

行政区	区	平柳							巻						
	班	上柳	城野	谷地	新田	横前	川前	川南	第1班	2	3	4	5	6	
	戸数	19	22	8	12	14	12	18	6	10	10	7	9	9	
自治組織	部落会	部 落 会 ・ 報徳会（農家のみ）							部 落 会						
	鉤柄講								契 約 講						
生活組織	神社、 寺、消 防														
	年令 集 団	上柳 青年会	城野 協友会	新田・谷地 青 年 会		横 前 青年会		青年会＝農協青年部							
		泉 会			若 葉 会			婦人会＝農協婦人部＝生活改善クラブ							
						一 心 会			山の神講＝若妻会						
		高 砂 会 ・ 婦 人 会							六 十 寿 会						
生産組織	農家実 行組合								農 家 実 行 組 合						
	稲 作	上柳集団 栽培組合					横前集団 栽培組合		さつき会	農 友 会					
	その他	養豚部・施設園芸部・防除実践班							酪農組合・養豚組合						

注. 平柳部落には、報徳会という農家のみで構成する集団がある。

図2 自治組織並びに派生集団の組織範囲

会」と3～6班の人々で構成される「農友会」（いずれも水稻関係組織）があり、昭和40年代初の共同活動が活発に行われ注目を集めたが、田植機械の導入を契機に、一方で兼業化が著しく進行したこともあって沈滞している。

2. 平柳部落における組織集団活動

自治組織：平柳部落には「報徳会」という農家のみによる組織があり、実質的に部落活動を支えている。共有財産をもちその収益を部落運営費に充当している。契約講は小班を単位にして構成されているが、昭和22・3年ごろ改組し非農家も含めて再編した。

平柳部落会は行政区と表裏一体をなし、区長は農協より部落協同組合長を、小班の班長は農家実行組合長をそれぞれ委嘱され実行組合ともかさなりをみせている。

生活関係組織：年令集団は小班を単位に構成されている。組織化の状況並びに活動の様子は各班により多少異なるが、青年会活動も婦人組織活動も活発であるといっている。高砂会・婦人会は平柳部落としてまとまっている。

生産関係組織：部落には「横前水稻集団栽培組合」と「上柳集団栽培組合」がある。前者は全面共同作業を行っており、51年以降は畑作、施設野菜、畜産等の複合部門も取り入れるに至っている。後者は秋作業の共同化を実施している。この集団に代表されるように平柳部落の農業は厳しい時代を迎えながらも発展的に進行している。この結果部落内には水稻集団栽培組合、水稻+畑作集団組合があり

その他畜産や施設園芸等との複合経営など多彩な農業展開がみられる。

3 集団構成からみた旧村（地区）の性格

1. 浅水地区

浅水地区においては、住民の自治的まとまりを単位部落にしているが、現在の農業状況から、単位部落の地域に密着した諸活動は弱体化している。この結果、単位部落の連合体としての浅水地区レベルでの趣味的なサークル活動が住民相互のコミュニケーションの絆として展開している。このことから浅水地区は社会結合の単位として機能していると考えられる。

2. 鳴瀬地区

鳴瀬地区においては、各種組織活動は部落内でまとまりをみせ、組織によっては小班で独立構成している。部落の農業の活発化を基盤に部落内の諸活動は活発であり、対照的に鳴瀬地区レベルの社会結合の単位としての性格は弱いものとなっている。

4 ま と め

以上のように、旧村（地区）という範域の地域住民の暮らしとの関わり方は、当該地区のもつ条件により異なる。すなわち町の中心性の強弱、単位部落内諸活動の状態等上位、下位の地域との相対的關係により異なる。これはとりまなおさず当該地区の町村合併の歴史に関わるものである。